

第5章

トルコにおける統治性研究の動向

村上 薫

要旨

トルコの社会福祉を統治の視点から検討するための準備作業として、統治性の概念を用いる先行研究を整理する。先行研究は(1)自律的な市民の形成と民主化をめぐるトルコの主流派社会科学の議論、および(2)ネオリベリズムは国家の役割を縮小させるという一般化された議論にたいする反論を行ってきた。また統治性の分析枠組みの諸局面のうち、統治の技術を主に検討している。

キーワード：トルコ、統治性、ネオリベリズム、セキュリティ

I はじめに

本稿のねらいは、トルコの社会福祉を統治の視点から検討するための準備作業として、統治性概念の導入の状況を先行研究の整理を通じて明らかにすることにある。統治性とは、「特定の合理性と規範を内在化した主体形成のための自己訓練と管理を人々に要請する、知と権力の装置」（フーコー2007）であり、「個人や集団が、支配や抑圧よりもむしろ、彼ら自身の主体の形成を通じて統治される生-権力のフィールド」（Gordon1991）である。

トルコ社会政策研究は、社会保険制度と労働法を主な対象に、法律・制度研究を中心に進められてきた（たとえば Talas 1992）。だが 2000 年代以降、社会政策のなかでも社会福祉の分野、とりわけ公的扶助が注目され、EU や世銀など国際機関の支援を得て、貧困にかんする大規模な実態調査も実施されるようになった。背景には、経済・雇用構造の変化に起因する貧困問題の深刻化がある（Oğuz and Pınarcıoğlu 2001）。従来の社会保険・労働法研究と、新たに着手された社会福祉研究は、社会保障や労働法を市民の権利ととらえ、より近代的な制度の構築を目指すという姿勢で共通している。社会福祉研究は、公的扶助制度の運営におけるイスラム的慈善の論理の作用（Buğra2001, Buğra2007）、ソーシャルワークのネオリベリスト的制度改革が引き起

こす社会的排除 (Yazıcı 2008)、あるいはソーシャルワークにおける家父長的な論理の作用 (Yazıcı 2007) などを問題化し、社会権にもとづく近代的な社会福祉制度を構築する必要性を主張してきた。

トルコにおいて現在主流の社会科学は、アカデミズムに長いあいだ影響を与えてきたケマリズム (トルコ革命の指導者で共和国の初代大統領であるケマル・アタテュルクの改革思想) の啓蒙主義を批判し、その限界を指摘することに精力を傾けてきた (たとえば Kasaba and Bozdoğan 1997)。それによれば、国家エリートが語る近代化と人々が生きる現実とが乖離しているのは、国家エリートの近代化プロジェクトが現実を見誤ったため、あるいは非民主主義的な国家主義の伝統が庶民の願望や歴史的文化的な経験を見誤ったためであった。エリートは物言わぬ庶民を見誤って改革を推進したために近代化に失敗したのであり (Keyder 1997)、エリートによる社会工学的プロジェクトが生み出したトルコ人アイデンティティは所詮はつくりものでしかないと考えられた (Kadioğlu 1999)。近年の市民社会や公共性をめぐる議論も、国家や国家と一体化したエリートに対抗できる自律的な市民の育成の必要性という観点に立っており、関心を共有している (たとえば Özbek 2004)。こうした社会科学のありかたを考えれば、社会政策研究が社会福祉や労働立法を何よりも市民の権利と位置づけ、政策研究を中心として進んできたのは当然だったといえよう。

だが物言わぬ庶民／国家に抵抗する市民という図式に立つ現在主流派の社会科学にたいしては、批判もある。社会学者のアフスカらは、ケマリズムの啓蒙主義を批判し「上からの改革」の限界が論じられるとき、唯一の主体はエリートとしての市民であり、それ以外の人々は「民衆」としてプロジェクトの対象として受動的な客体として位置づけられてしまうと指摘する (Ahşka2009,Güney2009b)。だが実際にはこうした人々もまた、政治の言葉を話すことはできなくとも無言の承認や交渉、妥協を通じて政治権力に関わってきた。とすれば、人々の政治権力との関わりを描こうとすると、支配や抑圧といった強制的な権力よりむしろ人々の内面に働きかけ主体を立ち上げさせる権力に注目することが重要となり、有用な概念のひとつとして統治性が浮かび上がる。トルコ社会の分析に統治性概念が用いられるようになったのは、ここ数年のことである。以下ではそれらの限られた研究の主題と関心を整理することを通じて、今後トルコの社会福祉の分析に用いるための手がかりを得ることとしたい。

II 統治性研究

統治性を分析概念として用いる研究の主たる関心のひとつは、ネオリベラリズムの統治性とセキュリティへの関心の高まりである。背景には、近年のエスニックな衝突

やリンチといった暴力の増加がある。発端となったのは 2005 年のネブルーズ（クルドの新年祭）にトルコ国旗が焼かれた事件である。軍が非難声明を出すとその二週間後、黒海沿岸のトラブゾン刑務所で政治犯の独房制度に抗議活動をしたグループがクルド系非合法武装組織（PKK）のメンバーだという理由で襲われるという事件が起きた。この事件に誘発されるようにその後、2007 年のアルメニア系コラムニスト Hrant Dink の暗殺まで 30 以上のエスニックな衝突やリンチ事件が起きた。また同性愛者のデモにたいする実行使や女性にたいするレイプや殺人も増加している。こうした暴力の増加はセキュリティへの関心を高め、警察組織の拡大をもたらしたと言われる。

2000 年代以降のトルコでは EU 加盟のために法律が整備され、市民社会活動が活発化した。にもかかわらず最近になって政治的主張を暴力に訴える事件が増加し、国家権力の発動がむしろ増えているのはいったいなぜなのか。リベラルの政治分析は権威主義的な国家が存続する理由を民主化の遅れや、公共圏における議論の不足、市民社会の弱さなどによって説明してきた。これにたいし異なる解釈を与えたのが、統治性の議論を援用する論者たちであった。

Berksoy の「ネオリベラリズムと社会的なものの再構築：1980 年以降の西洋とトルコにおける警察組織とその構造変容」は、ネオリベラリズムのもとでの警察組織の変容を描いている（Berksoy 2007）。1980 年代以降、英米と同じくトルコにおいても市場経済的な合理性にもとづく、社会的リスクの最小化を目的とした潜在的な暴力の発見が、治安維持活動において重視されるようになった。その結果、警察の組織拡大と準軍事組織化が進められる一方で、犯罪を予防するための管理的監視的な措置がますますとられるようになっている。警察はエスニック・宗教マイノリティや大都市のアンダークラスを「社会の脅威／内なる敵」に見立て、強制力を行使するとともに管理し、無力化させ、そして監視下においたが、これはネオリベラルな経済政策によって格差が広がり分断された社会を再構築する手段ともなった。こうした警察の変容は、しばしばトルコの民主化の遅れと結びつけて議論される。しかし Berksoy は、米英の警察もトルコに先立って類似の変化を経験していることを指摘し、トルコにおける警察の変容は後期資本主義国家のネオリベラルな統治技術という文脈に位置づけられると述べる。

市場にたいし国家が優位とされる福祉国家とは異なる、新たな統治性としてのネオリベラリズムは、市場の合理性にもとづき、人々の自由を尊重することによって不確定性を管理しようとする。そこでは国家から自由を与えられた社会（市民社会、民間セクター）が、国家と一体化し統治の主体となるという逆説が起きる。Yardımcı の「包囲された日常生活：民間警備、都市生活、および統治性」は、治安産業の発達が治安の民営化である以上に、国家とともに社会秩序を維持しようという「警察市民」のメンタリティに支えられていると指摘する（Yardımcı 2009）。トルコでは 2000 年代以降、

民間の警備会社の設立が相次ぎ、大都市のショッピングモールや塙で囲まれた郊外の高級アパート地区（ゲイテッド・コミュニティ）を制服姿で巡回する警備員の姿が日常的な光景となった。これは東南部の内戦地域からのクルド系住民の強制移住や社会経済格差の拡大、不均衡な都市化を背景とする犯罪予防への関心の高まりに対応している。警備員にたいするインタビューからは、彼らが社会秩序維持の権限を国家と分有していると考え、国家と一体となって治安維持につとめようとしていることがわかる。すなわち治安産業の発達とは、治安維持という問題領域からの国家の退場を意味しない。そうではなく、治安産業は国家が独占してきた暴力の一部を請け負い、国家の治安維持機能を補完することによって、国家が社会に遍く存在するために貢献しているという。

ネオリベラリズムにおけるセキュリティへの関心と「社会」の役割の上昇という枠組みは、Özkazanç (2007) にも共通する。Özkazanç は、司法が厳罰化に向かう一方で、市民社会や共同体の社会管理機能への依存が高まっているという近年の一見矛盾した状況が、調整と管理のメンタリティとしてのネオリベラリズムの上昇と関係していることを指摘している。

リンチという究極に私的ともいえる暴力を、同様の枠組みに位置づけてみせたのは Gambetti の「権力の顔の変容：ネオリベラリズム、暴力、および制度的政治の排除」である (Gambetti 2009)。フーコーによれば、ネオリベラリズムの権力は、社会全体を管理し規律づけてリスクをなくすことではなく、自由市場に負担をかけない程度にリスクを最小化しようとする。犯罪者は規律化や正常化の対象としての病的な個人ではなく、ほかの人々と同様、コスト-ベネフィットの計算にもとづいて行動する合理的な主体とされる。犯罪をゼロにすることは目指されない。犯罪率が一定に保たれることが重要なのであり、犯罪があることは社会的病理ではなく、むしろ社会が犯罪の拡散を管理できる機能を備えていることの証であるとされる。Gambetti はフーコーの議論を敷衍し、治安とは暴力をなくすことではなく、暴力によって死んでもかまわない人々が一定程度存在することを意味すると述べる。つまり暴力はネオリベラリズムの副作用（したがって根絶が可能）ではなく、この新しい権力構造に内在的である。これは、リンチがしばしばエスニックな衝突の形をとることに端的に現れている。リンチが発生する背景には所得格差や雇用機会の喪失といった経済的な問題が横たわっているが、経済的な不満はしばしば「国民にとっての重要問題 *milli hassasiyetler*」の言説を媒介として暴力に結びついていることに注意しなければならない。リンチにおいて標的とされる人々のイメージは、反体制派＝クルド＝PKK からリベラル派＝知識人＝民主主義者＝アメリカ支持者＝アタテュルクの敵へと外延を拡張させてきたが、これは単なる急進左派やクルドにたいする非寛容の高まりというよりも、「望ましい市民」は誰かという定義の再編成を反映している。政治エリートがリンチを一方では批判しつつ、一

方では正当化するような言動をとるのは、リンチの標的のイメージをつくりだす「国民にとっての重要問題」の考えを共有しているからである。以上から、マイノリティにたいするリンチは、国家が行使するはずだった暴力を人々が下請けしたものであることが明らかとなる。市民社会は国家権力から自立し、それに立ち向かう批判的な領域だとされる。だが Gambetti によれば、実際に起きているのは、これまで国家の独占事項とされてきた暴力と人権侵害を社会の諸アクターが行うようになる「暴力の民主化」であり、社会の国家支部化である。フーコーは、国家の統治性化は社会の国家化をもたらすと指摘したが、トルコにおけるエスニックな衝突やリンチもまた、制度的には国家からの自立性を高めた社会が、国家（政治エリート）と規範を共有し行動した結果であった。

「社会」が統治の主体となるのは、暴力やセキュリティの領域にとどまらない。Ipek-Can (2009) は、トルコにおける市民社会の発展は国家の秩序維持機能と補完的な関係にあったと指摘する。トルコでは 1999 年のマルマラ地震後、保健衛生と教育の分野を中心に社会サービスを提供する市民社会組織の結成・活動が奨励された。政策を批判し自由、人権、平等を求める市民社会組織がマージナル化されるのにたいして、社会サービスの供給を通じて国家を手助けするこれらの組織は優遇されてきた。Ipek-Can は、教育分野で活躍する NGO について、ケマリストの近代主義とネオリベリズムの自己責任の強調という異なる志向が調和することにより、ボランティア精神をもち社会に貢献する道徳的な主体という新たなシティズンシップのイメージがつくられていると指摘する。

以上でとりあげた文献がいずれも統治の技術に注目するのにたいし、Üstündağ (2005) は、統治におけるもうひとつの重要な問題領域である主体の形成をとりあげている。Üstündağ はイスタンブールの低所得地区での調査を通じて、貧困が統治の技術をつくりだし、「従順で規律正しい困窮者」という主体を生産していることを示した。調査地の人々は、援助機関の職員やマスコミの取材にたいして自分たちの窮状を積極的に語る。しかし彼らが語る内容は、援助機関が設定する「援助に値する困窮者」の条件に沿ったものでなくてはならず、本来多様であるはずの貧困の経験は、物質的欠如という均質な物語に収斂させられてしまっている。Goode and Maskovsky (2001) などアメリカの人類学者たちは、困窮者は不可視化され抑圧され管理されて無力化されていると指摘する。だがトルコの事例では対照的に、少なくとも表面上は、人々は語ることをおおいに奨励され、語るという行為を通じて統治する側にとって都合のよい主体として主体化している。「貧困」が統治技術と人々の主体化の領域として構築される過程では、国家は貧困という傷を癒す者として再構築され、一方、人々はそのような国家に貧困の管理においてより多くの支配と統制を求めるような主体として主体化されるのである。

III おわりに

以上を整理するなら、トルコ研究において統治性概念は、(1)自律的な市民の形成と民主化をめぐるトルコの主流派社会科学の議論(たとえば NGO の活躍は民主化であり、エスニックな衝突は民主化の不足とされる)、および(2)ネオリベリズムは社会にたいする治安や福祉サービス供給における国家の責任を縮小させ国家の役割を後退させるという一般化された議論の限界を指摘してきた。そしてその際に注目されたのは、「社会」に自由を与えたはずの国家が、いかに巧みにそれを統治しているか、という点であった。Dean は、統治性の分析枠組みの四つの局面として、(1)定義可能な領域、(2)技術的側面、(3)知識の形態、および(4)アイデンティティをあげている (Dean 2010)。この分類に従うなら、これまでのところトルコでは主に(1)と(2)の観点から論じられてきたといえる。

国家から自由を得たはずの「社会」が国家と一体となって社会秩序の維持に加担しているという議論の立て方は、トルコで国家のあからさまな暴力行使が依然として続いており、国家中心主義的な分析が意味を持ち続けていることとあるいは関係しているかもしれない。しかし統治性概念を用いることの魅力は、統治の構図や技術を明らかにしてみせるだけでなく、Üstündağ (2005) が試みたように統治の対象とされる人々の内面からも統治を描く点にもある¹。今後福祉政策を統治の観点から分析するにあたっては、社会福祉の実践が人々によっていかなるリアリティをもって生きられているかという点に踏み込み、権力のより大きな構造と関係づけることが課題となろう。

参考文献

日本語文献

- フーコー、ミシェル 2007.『ミシェル・フーコー講義集成 安全・領土・人口』高桑和己訳、筑摩書房。
- フーコー、ミシェル 2008.『ミシェル・フーコー講義集成 生政治の誕生』慎改康之訳、筑摩書房。

¹ 福祉を統治と関連づけて議論する先進国における研究もまた、主体形成よりも統治の技術に焦点をあててきた (たとえば Cruikshank (1996) や Ong (2003))。

外国語文献

- Ahska, Meltem 2009. “Türkiye’de İktidar ve Gerçeklik (トルコにおける権力とリアリティ)”
in Murat Güney ed. *Türkiye’de İktidarı Yeniden Düşünmek*, İstanbul: Varlık Yayınları.
- Buğra, Ayşe 2001. “Ekonomik Kriz Karşısında Türkiye’nin Geleneksel Refah Rejimi (経済危機に直面するトルコの伝統的福祉レジーム),” *Toplum ve Bilim*, 89.
- Buğra, Ayşe and Çağlar Keyder 2003. “New Poverty and the Changing Welfare Regime of Turkey”, UNDP.
- Buğra, Ayşe 2007. “Poverty and Citizenship: an Overview of the Social-Policy Environment in Republican Turkey,” *International Journal of Middle East Studies*, vol.39, no.1.
- Berksoy, Biriz 2007. “Neo-liberalizm ve Toplumsalın Yeniden Kurgulanması: 1980 Sonrası Batı’da ve Türkiye’de Polis Teşkilatları ve Geçirdikleri Yapısal Dönüşüm (ネオリベラリズムと社会的なものの再構築: 1980 年以降の西洋とトルコにおける警察組織とその構造変容),” *Toplum ve Bilim*, 109.
- Cruikshank, Barbara 1996. *The Will to Empower: Democratic Citizens and Other Subjects*, Ithaca: Cornell University Press.
- Dean, Mitchell 2010. *Governmentality: Power and Rule in Modern Society*, 2nd ed., London: Sage Publications.
- Erdoğan, Necmi ed. 2002. *Yoksulluk Halleri: Türkiye’de Kent Yoksulluğunun Toplumsal Görünümleri* (貧困の諸状況: トルコにおける都市貧困の社会的諸相), İstanbul: Demokrasi Kitaplığı.
- Gambetti, Gambetti 2009. “İktidarın Dönüşen Çehresi: Neoliberalizm, Sıddet ve Kurumsal Siyasetin Tasfiyesi (権力の顔の変容: ネオリベラリズム、暴力、および制度的政治の排除),” *İstanbul Üniversitesi Siyasal Bilgiler Fakültesi Dergisi*, no.40.
- Goode, Judith and Jeff Maskovsky eds. 2001. *The New Poverty Studies: The Ethnography of Power, Politics, and Impoverished People in the United States*, New York: New York University Press.
- Gordon, Colin 1991. “Governmental Rationality: An Introduction,” in Graham Burchell, Colin Gordon and Peter Miller eds. *The Foucault Effect: Studies in Governmentality*, Chicago: The University of Chicago Press.
- Gupta, Akhil and James Ferguson 2002. “Spatializing States: Toward an Ethnography of Neoliberal Governmentality,” *American Ethnologist*, vol.22, no.2.
- Güney, Murat ed. 2009a. *Türkiye’de İktidarı Yeniden Düşünmek* (トルコにおける権力再考), İstanbul: Varlık Yayınları.
- Güney, Murat 2009b. “Önsöz (序論)”, in Murat Güney ed. *Türkiye’de İktidarı Yeniden*

- Düşünmek*, İstanbul: Varlık Yayınları.
- İpek Can, Yasemin 2009. “Türkiye’de Sivil Toplum Kuruluşları: Modernite, Milliyetçilik ve Neo-Liberalizm Kısacasında ‘Gönüllülük’ (トルコにおける市民社会組織：近代性、民族主義、およびネオリベラリズムのくびきのための「ボランティアズム」),” Murat Güney ed. *Türkiye’de İktidarı Yeniden Düşünmek*, İstanbul: Varlık Yayınları.
- Işık, Oğuz and Melih Pınarcıoğlu 2001. *Nöbetleşe Yoksulluk*: (貧困は順番に), İstanbul: İletişim Yayınları.
- Kadıoğlu, Ayşe 1999. *Cumhuriyet İradesi, Demokrasi Muhakemesi: Türkiye’de Demokratik Açılım Arayışları* (共和国の意志、民主主義の判決：トルコにおける民主主義の発展の探索), İstanbul: Metis Yayınları.
- Kasaba, Reşat and Sibel Bozdoğan eds. 1997. *Rethinking Modernity and National Identity in Turkey*, Seattle: University of Washington Press.
- Keyder, Çağlar 1997. “Whither the Project of Modernity? Turkey in the 1990’s,” in Reşat Kasaba and Sibel Bozdoğan eds., *Rethinking Modernity and National Identity in Turkey*, Seattle: University of Washington Press.
- Keyder, Çağlar 2005. “Globalization and Social Exclusion in Istanbul”, *International Journal of Urban and Regional Research*, vol.29 issue 1.
- Morgan, Sandra and Jeff Maskovsky 2003. “The Anthropology of Welfare Reform: New Perspectives on U.S. Urban Poverty in the Post-Welfare Era,” *Annual Review of Anthropology*, vol.32.
- Ong, Aihwa 2003. *Buddha is Hiding: Refugees, Citizenship, The New America*, Berkley: University of California Press.
- Özbek, Meral ed. 2004. *Kamusal Alan* (公共圏), İstanbul: Hil Yayın.
- Özkazanç, Alev 2007. “Biyo-politik Çağda Suç ve Cezalandırma: Denetim Toplumunda Neo-liberal Yönetimsellik (生政治時代の罪と罰：管理社会におけるネオリベラルな統治性)”, *Toplum ve Bilim*, 108.
- Talas, Cahit 1992. *Türkiye’nin Açıklamalı Sosyal Politika Tarihi* (トルコの社会政策史), Ankara: Bilgi Yayınevi.
- Üstündağ, Zülal Nazan 2005. “Belonging to the Modern: Women’s Suffering and Subjectivities in Urban Turkey,” Unpublished doctoral thesis submitted to the Department of Sociology, Indiana University.
- Yardımcı, Sibel 2009. “Kuşatma Altında Gündelik Hayat: Özel Güvenlik, Kent Yaşamı ve Yönetimsellik” (包囲された日常生活：民間警備、都市生活、および統治性), *Toplum ve Bilim*, 115.
- Yazıcı, Berna 2007. “Social Work and the Politics of the Family,” Unpublished doctoral thesis

submitted to the Department of Anthropology, New York University.

Yazıcı, Berna 2008. "Social Work and Social Exclusion in Turkey: An Overview," *New Perspectives on Turkey*, no.38.